

生活文化産業学

(第 1・3 木曜日 午後 14 時～／成徳学舎)

2013 年度前期 第 2 回 生活文化産業におけるリスクの分析と回避

担当：大倉 朗寛

～講義の流れ～

1. はじめに／生活文化産業におけるリスクとは (14:00～／30分)
2. 生活文化産業におけるリスクの分析 (14:30～／30分)
3. 生活文化産業においてリスクの回避 (15:00～／30分)
4. ディスカッション、まとめ (15:30～／30分)

～内容～

1. はじめに／生活文化産業におけるリスクとは (14:00～／30分)
 - ・衣食住 (ハード) に関するリスク
→設計図や種子があれば、万一失っても再生は可能
 - ・知働集 (ソフト) に関するリスク
→プログラムなど電子データや企画書など書類があれば、万一失っても再開は可能
 - ・美感脳 (センス) に関するリスク
→ヒトの感覚なので再生は不可能=いかに保存するか？
どうやって再生可能にするか？

※価値は、仮に失ったとして再生可能の難しさによって算出できるとすると、センスに関する価値が最も高いといえる。

2. 生活文化産業におけるリスクの分析（14：30～／30分）

生活文化産業におけるリスクとは、まずは生活文化産業という新たな産業の創出を先導する地域リーダーや地域プロデューサーが活動する上で想定されるリスクを考えることとなり、大きく分けて3種類に分類される。

まず1つ目は、何よりもまず自らの安定した生活基盤の確保に関するリスクである。安定した生活基盤とは、安定した収入（仕事）を確保して、安心して食べられる食料あるいは食事を調達するルートを確保し、心が安らぐ住空間を確保することである。その上で、時間とお金の余裕を創り、仲間や地域のために働きかけてゆくのが地域リーダーや地域プロデューサーの役割となる。実はこれらが意外と難しく、これらが揺らぐと、まず自らが創造的に自立しながら様々な人とつながって地域を善くしてゆくことが難しくなってくる。「いま仕事が忙しくて地域のために頑張っている暇がありません。」という言い訳をしているようでは、地域リーダーは務まらない。

次に2つ目は、相互に学びあえる場や機会づくりに関するリスクである。まず場を確保する際の手続きから、場を利用する際の安全性などが重要視される。その上で、その場に集まってもらう機会（イベントなど）を企画する際、悪天候や自然災害の発生なども十分に考慮して対策を講じておくことが重要である。特に屋外で開催されるイベントを企画する際には、悪天候というリスクを想定しておくことが極めて重要である。「雨が降ったので人が全然集まらなかった。」という言い訳をしているようでは、地域リーダーは務まらない。

最後の3つ目は、情報発信（収集など）に関するリスクである。特に、情報伝達ルートについてのリスクを想定することが必要がある。たとえば、普段使っている携帯電話であってもインターネットであっても、通信障害が発生した場合、あるいはウェブサイトを表示するために必要なサーバ障害、端末の故障などが想定される。「通信障害が発生したので、どうしようもありません。復旧するまで待ってください。」とか、「ネットが使えないので情報発信できません。」という言い訳をしているようでは、やはり地域リーダーは務まらないのである。

3. 生活文化産業におけるリスクの回避（15：00～／30分）

生活文化産業におけるリスクを分析できれば、それらをいかに回避するかについて考えておくことが重要である。

まず1つ目の安定した生活基盤の確保に関するリスクに対しては、収入源を多様化することである。具体的には、(A) 時間をお金に換える労働による所得と、(B) 時間とは関係なくお金が得られる不労所得（書籍の出版による印税、サーバ維持管理、不動産賃貸など）とに分けられる。(A) の場合、1つの会社に属して平日に勤務し、土日祝の休日に時間的な余裕を創るという方法が考えられるし、あるいは複数の会社に属して勤務シフトをうまく組めば、平日でも時間的な余裕を創ることができ、1つの会社に属するよりもより多くの所得を得ることが可能になる。あと、一つの会社に属している場合、自分希望していないような会社の方針によって、勤務地を変更されるなど様々な勤務状況の変化によって地域に根付けなかったりする場合が考えられる。その人財が優秀であればあるほど、その地域にとって、これほど不幸なことはない。何とか回避する方法はないものだろうか。

次に2つ目の相互に学びあえる場や機会づくりに関するリスクに対しては、移動ルートを整備（特に悪天候対策）することである。具体的には、悪天候時の避難場所の確保（公共交通機関などの移動ルート、臨時駐車場の確保と会場までの導線の整備など）と、その通知方法（情報伝達ルートの多様化については後述）の整備である。当然のことながら、当日や喫緊の情報伝達はパソコンからしか見れないメールアドレスに送信しても無用であるし、携帯やスマートフォンにメールを一斉配信しても、すべて届くとは限らない。なので、情報伝達ルートを多様化し、かつ多様化した情報伝達の入口となる媒体が、常時更新される状況にあることが望ましい。

最後の3つ目の情報発信（収集など）に関するリスクに対しては、情報伝達ルートを多様化することである。その上で、情報伝達の入口を整備することが重要となる。具体的には、市民一人ひとりが常に携帯している携帯電話やスマートフォンからより詳しい情報が得られるように工夫することであるが、そこで操作性をより簡単にすることが重要となる。たとえば、詳しい情報が掲載されたウェブサイトのアドレスにアクセスしたい場合や、記号が含まれた長いメールアドレスへメール送信する場合は、かなりストレスを感じる操作となり、より詳しい情報へアクセスする意欲が失われる。そこで、スマートフォンであれば、1回または数回の操作で、より詳しい情報へアクセスできたり、メール送信できるように工夫することになる。また、通信障害によって、携帯電話やスマートフォンそのものが一時的にでも利用できなくなる場合が考えられる。特に、ある特定の場所に、多数の人が集まってインターネットにアクセスあるいは電話をかけようとするアクセスしにくい状況になる可能性が高まる。

そのために必要なハード（通信環境も含む）やソフト、仕組みなどについては次回（第3回）以降に詳しく解説させて頂くことにする。こういったことを知ることで、地域リーダーあるいは地域プロデューサーとして、かなり有利に活動できることになる。

4. ディスカッション、まとめ (15 : 30 ~ / 30 分)